後鳥羽院御抄

[illegible]

慶應義塾圖書館之藏

後鳥羽院御鈔

俊成卿女
越部禪尼消息

やまと哥を詠するならひは
古今にいたるまて人のいさめ
すゑまて伝はりたえせす
にもはすとて天性の心あらそて
のちの風情のへなられと
めつらしきも善悪はなき
わか筆意すよりうち
むさとくいて一隔とも

思かへし詞はうるはしく筆
あはれをかくしあらはし詞はやはらかく
きびしきあり詞は風情をも旅と
なをあり詞はすこしとけきそなる
いひもあはせてつゝきの筆は
されはちゝをいはきさす要とこ
き交也羽あつまつかしいま
初心の人は代々あまた勝してはしめ

延喜とおくるは七條あつまりし
人なりて斟酌さるへき事也
一部学問して様これ歌の
ゆるして本学なとわすれ候へは
よろしよの流孫よは人の万葉
集はちくとよみならひと見て
かくしてされとの事も用捨
あるせ孫は万葉集めきと候

よりて詠する事とえ侍れ
うまいし家の事にておろそかには
文字の詞けりとまりんすへし
惣もともいさくへきなる古今
集にても書てはおほくよりかれ
ぬへき事もいひくしてのせられ
すまし候程もへきなる
一道なれはのしよなかやきはめつき

事にして随分一寸に詠し一時
に百首詠なともする事練習也
よろしきとて百首と詠
て詠せしとおほゆれは又ゆめ／＼く詠
三題詠は題と人々詠する
いつれも始終よきさたならんにて
みせとして見なときこれ卒
爾の用にもならんそ究竟の事

かきのもとの人まろ 大納言経信にはよ
そけもあまうれしくして古は
やく／＼みな見て又後頼朝臣
のもれ哥にもこと二類
よめとうるはしくやかましきにも
ふかくよみて又よみくと心
えよう捐也 すなをにかく
あるいは一類をもはつる字家なり

唐衣きるすゝきなり
うつしなゝへとはやその山っ桜よ
もけしまとハいのうね地と
あそすゝなり
又
うちつくまの入江は風は
おりつ今それ秋の中くま
ろうきとなり
夜去津門田府尊にて新供あは

時頼ハきれハ和の字をやとく
辿きかうしとまき首て起
そうともやまつもきかさきを
もとい題と人の合せゆるまい
葉の地ようれ題と合せて
まれ風情とのさうあまきいう稽と
生字にてよくいきなりして
難く歌字ども見えうつ

俊頼の時にハ粉河西もりなる
もとさきにハいにしへ称なる将なる
やはらかくうしよ字もあまくあ
はつろときかくてもあまきさとよ西
是ハ唐書とられそとうちあるも引
なかもしらくてしつも字もいは
あまくあまさくくてきかくう記
方もうりハあひの称て人生得

の夢人とかけ将軍れ人
まで称ひるとも人きうよあつ記
お前説のど手なる清輔けなる
ことあけりましともはそのあれめはさ
ますく人と
かしへろうちれしりまれとくに
いくせよるわれ人何の名を
きかにていたる

後鳥羽院はしきしまやまよりみさ
め人代あやめさまは水といふ所
やうはうたよみとやな
名川山、水無瀬まてよむ
ありても鹿のそらくなる
桜のうれうた御ともやさきちん
世はなりては大坂の前二条関
白中御門の桜殿 吉水前大僧正

まゝく〳〵 北勝なる寺院はいよいよ
見く〳〵とあらやうまはあまきれ
桜殿はなそけをも桜として讃岐
桜をてつきいつもそや今の
のなき寺ましよしあれたか
すきなりさ 百首なとのあまりよ
地寺よりくみへしまそかへりては
北より川へなとし 秀哥

おゝかた晴くてあらそ ぬるとハ
かさのせうし 大僧正ハおほやう
西行ハなかなかなるらくなから哥
いたしまの上手にてもよし寂と
めうしれハ撰とはいのま撰き
あゝよしもうのあはこおほく
へのくちよわる哥あさ
やよけれ 本の楽よ神とく便

寂ハけくハ忠しやそらよおそひ
なかほまともよの清寂ようらく
よみうち中よ寂に此也もハおり
あふ家もよ源くりて要よ
おわそよ 地ゆくへの神 杉と
けるの庭の此荘かうへなり
忠はらつさハ此わとれ氷にみわっ
松けはわ 寂蓮 定家ハ飛鳥井

手跡ハならハ寂蓮ハいつ成さわ
ますする事よ見えしゆゑおもわ筆
しくてきうれはよそけなれ
いくハそてくハすりかもハこ
たえ家わる哥よまひとてさひしく
のやくはかゝるあくてと三ハれ
哥まよ見えけり相わ躰き
俊成は定家くきと哥よみ連

哥しるし相を由てもにハれ
事しゆへあるやうよなしかく
嘉気の堪躰とてきふ後ハ
本ハしはしハきちとけりつ
書人のあつかいわさよ蒸
もそてきわき哥まうかへつも
なる口ふいくしく歌哥とも
よ見人わ川めるかおほさなれはも

よく由あるなきけもあさ守て
めつらしく母
雅経ハさまく筆かへて哥よみ
ぬかはいくさけわか哥をとハ
も人和をおほくハそてらしとかも
手なりうそてこさ家隆代明比
称ちうをうけおつて申てすさ
哥もあとのわすまそてはしまる

やうまあまき由ちふまへても
うら哥の手にもれしのひ
そる地もあまきしつそを近年
定家幸下此哥のちとせとより
きよ本女房哥もえ人ハ母わかや
けしこさ哥にまくよめまき言の
そりよはかよ松な木の葉をすて
うきさく母ハおもすわすれしよの

おとのかゝする小船のあしよはの
かはもおほくやはしきうきもおき
人の春ちりも盛には小く
まくほしさ花の時は小かく
まへきかし桜もくさちて
ゆへは花のちるかさわるゝ
よしそむくやはきき宗は
ゆうなき船かはしりは勝なる

父の形とさともあさくとなりぬる
うへは峰て修人の夢も盛ませ
年すやはくりみくとわるやうよ
ゆうする雨には小あはれく命
道は遠しくるはゝ命も推勝なる
き夢見てかさくさる夢き推し
ときりさきし引汲のゆは
手わとねまいはちつとりて馬を便っ

むかし傍若無人ありてかりもをさ
いらさ他人の物ときくのをなす
世て彼是の事なきのやうさき
いてこと事よりむさるを
以事あれはきかると
きさよりて我等あれとも讃
事よあれはよしなと之八服美の
事あるあるき元年よりはしめうち

花のさかりも芸れ春のなすま
やすいふてわてしのいてかれ
むのりよて男若れ哥はんよう
御つりもしよ定家なと書ゆはて
詠していく
もこし此へて名きこえて花の
春わめるれともあられやかまはを
なを沈鶏として廿年よれとよき

遠慮のなくやさしくみえし人
おほくも帝氏の勝事にてあや
きもしり讃むへきことみてき
先達ともなるすこれ善事は
ようて手にやさしく面白も
あるやうなることはあるまする
讃ことす家々のこまかき
日本内わらそうまれそこのかす意

程とありて中にも持統女帝へ
はつかりまはりそ年れ人の
しゐやのさしけせぬ事せられ
ならしハあるちよう学しさん
なかしかも新古今は事まて
おめさひれ撰集のわうさまは
これ筆ありさいくら讃し事
はや遠名ときて絶き苦しれかくて

ならひなりけれバ、ことにまなびし
されとも其様のならはしにて
よみならふ心の事なとハ、物様
うすくなりぬ人のよくハおろか事
すきかれの歌よみこそあれ地やハ
あれはまとも右の様ハ一様付
みわしかいて言ハ許宜れ
序よりて申さき家治むきし

事こ 詠事もわきまへあるべき
究勝守天下説も必不の傳字ハ宗
生国の毒ハつきまくす而ニ申ても
あるまじきるこれあまりけん様を
の遇会かへりてをの様の故実
をとえ候へ内ハよまく清濁をわきまへ
ならハ其根元をくとも 式を 物種とけ
紙なさるとものかゝりすなわちをんが

万人〃はかろき事はなけれとも
傍輩なくと讒謗され事やは
わろ地て婬マッ可のとさ財勝
れ地多けれとも人のまねはへき
もの〃わるき心はかりやう〃と
座敷をつんて詞をかくのえんよ
やはらきて本郷ともわるさ
うれ背すれなん初へれもの

ま孫て面躰なき事はかりぬ
宝家は出藤の上手にて心
おけなけれともうは〃の
こいはて言はれ財勝れ地
よてはる

秋をは吹あへぬ風はなつる
いくくの毒れはめの下なは
肉〃は秋をかまとうらつめら

すまゐさへあへぬ風にまつかうと
へ給ひとはいはきこ露の下草と
なけかれのるゝ草下あはれにて
いうかる亭かれ年和とかあかめ
陳子のいくされ身さの亭は海と
まゝまらてるらんーつまとも
かくめいくれ大諸侯也いまもと
あるべき事し侍きりてなきさ

こまかなる人の身す亭もまくく
みつしきとはのやけしくえん
かすのはつはてしかもこつくい
なれるあり身さのこまとてかき
そなるなのあはれかはいすをもれと
らうもなけきともいひすーらう
おとるはくきのみしきかれて
あそ草角もちかね地なとて

かやうの事とハ申すとも心えね
あいさ始の心の者事とて人皆は
あつ事おはしくすりしとのおほる
あれて心ある文なり輪行西
り申さん変立の者事ハさとて
いうやうしき人心つきよ年
あくハはまてあるやへよく皆
まあれ事帰那一えへの手れ

頭宗かれともよささるよくつ好
まハおはしまわかるてもらよ物
のわつ心まの子かあとりて在後く
事の人ノ所手とさらしなます
偏執の義也も人へてつまハ子ね
うあ事の人しあねハ事つ事ね
事也操条にても人て好代よこ
まれまハ事まてとうあきれ

をとひ見て猶手をえんゆゑての
うら見はわかしらん
秘蔵々々、努之有相傳之

写本云
仁治元年十二月日於大原山
西林院普賢堂以数多之人
不称法宗筆学本書写之
此法事如形他所無之子細
雖有之、誦頌書出来之
條難尽ク候、心外見へ々々
重信房　勝林院　在判
弘安十年七月日書写之一校
年此本之ミなる法字ノ本を
仍示書之

栂尾法ノ拗抜椎野寺所
浄金剛院長老覚道上人今七年
亦拗ノ白衍図友
来ル聖印モ召候故許一見
并宸筆弟子三代之法本
予通稍見人寄縁之故
許形志如涼跳飛展始也
云々故知見人而

安積香山隠士 斎

歯つゝりの猶く言葉の心にもかし
あまたゝく十餘代まてく事
ぬてう猶しうよろしきは見えて
こゝにはき事にたゆくはかなさ
さためしのいかにも三代まて
見てめる哥よとりてはおへぬ
此方よめてさく言葉と覚ゆ
侍ておぬ撰集此きてまて

あまの海よりそれとはて
て詞とも縁にはまし文字
やりてめよなよいくたりては
吏一とも猶おほくうのゆへ
三代集はあとそてのくせもあや
むしこ淺くつてやりて詞の
なよよさみ海海それ
けりなきわうれくらか擒書は

よりて哥あまたもちかきてたくゝ
世なれとつゐにそれよりやう
すたしくは金葉集詞花さきやく
うたやうにて千載集なともはやせ
歯おとろへ　物語にいそてあくは
序なとも人しもなにしやかん
たやうに覚ゆは哥もいさうそ
のいなかしんとたゝ見なてゝ子

新古今又春の花秋の紅葉
ことはにはいひかきつくし風儀
の秋の月果敢の雪れ秋よりや
うさいく四季一てれてりう
すれ詞ちよいまそめてし
ことうちもしろく京極殿の
かんなの序なと四つのひらかく
く雅よりむ人さしいりこもれく

やう〳〵新勅撰はかくまきまうす
中納言入道殿すゑかの上にてく
くとりてよくなまはかくさるし
桃えそひさけるめそてくく法師
うち代一人ていかへ内さ付
うれ車なき説ける法製とて
は車めもくれたるうちそし
うしの奇よくひ所えて法けたしふ益

おかまさなるはこさ〳〵さ極めし
すまうそて入道この名わつさ〳〵させ
終うさ七十首とやさきなりし
かさくくやとうちおほくき
出れは四君広文き文後成の為に
ますのますてそりてくらせ
終なる奇のをそさ次第の
御へとみてはつ書やうそれ

せきねあらしのすうに
御かたてさふらひて御くるまのさき
ところおところの多くさもなく火
多くしかすあまうとくなく
そねかたすくたてかさあそて
右てそはなすとさういくき
女房は法ほかつきわ
のすきものをうまてりしひゝ

かみのかくるをうれはそきあうれに
くしうえのさしひわかまて
あなうはやくしやとおほしくると
南殿のけしきさうはまたてなあ
てみれつらしくて哥もよく
もえらさかくなくいしうもてはや
かへもかうあかくれくおほしく
本より詞の花はいろまされひう

父はもとすけ村よりておはしませと
奇代そ由一井ハ由さりておはし
由すとやくはら事あそはし
撰しうけせ給ては勅撰に
のちきそ見えぬやうなく
天暦四年とや後撰のえらはて
庁のなしつほよりいつかたと
庁はまさかくすすこさき事なく

そてきくう椛よ又梨壺院の
れまこ去門院の字すらく
わらせおて院院の院也
ちろめれくひとうけたまはる
らやうむのおもむつかとうやて
やうふきくうちくうかくし
しまくよきて信もおもりて覚
奇の事こそ事こく事おほく

いはう方なき也もそくく
世の神様あまねく人ごとの尊や
のきは北梅のいかさまいまだせん
多くにはきさうにくい方して
うき／＼は身をおもてものね
やかうまう事いろ／＼もくや
らくうもおそろしく天地宮
のそえはしく内しく拝みく

なりゆく事かくつかさらし
てくまてを押あまねく神にまいせ
とく／＼全うはりは南無をはなをし
まはいのちてかくかく字かな
尽きてらしわろかたく法たかし濃
仏の法此人此ちかつきひとたつの
わしくひ
霊地いろの寺さ第よひつせは寺

はしのむくれおはれやあく
秋風よそれて西はやまおで
きゝてなほしとゆふかへそ
あはれしくいまはおもひなき
うらみくるまわのきたの代
とおもらしあきらか
宛きよくあふきし居ての是よ
くりかへるけのまさ

みやびはよかりしにわ
おほく

本云
先年ハ中院書写墨
つかうまつるは此本也

後鳥羽院御抄續後撰ゝ時越部
禪尼（俊成女）消息先年手並之處
為權家被借失之了誂或仁令
出書訖

觀應二年六月九日 [illegible]

右後鳥羽院御抄之一冊者冷泉殿
為秀卿以法眼令明也而之以奥書 者
西方行者頓阿御筆也然寺判形
無紛者也誠可謂稀上希歟耳

寛永四暦拾月二日

古筆了[illegible]

132X
26
1